

ハンガリーの就学前教育について

1989年～1992年・デブレツェン市を中心に

谷 暎 子

はじめに

東欧の激動期にあたる1988年～1992年まで、毎年ハンガリーを訪れることができた。1カ月前後の短い滞在であったが、改革の進むなかでの生活、文化、保育に接し、その変化を見聞きできたことは幸いであった。とくに1989年から3年間は、参加した夏期大学での生活を通してさまざまな体験をした。コシュート・ラヨシュ大学の「外国人のためのハンガリー語夏期大学」は、1927年に始まり、65年の歴史と伝統を持つ。言語学習の内容や教授人についての評価は高いが、運営面については、戸惑いが大きかった。しかし、この3年間の改革は、継続して参加した者を驚かせた。学習プログラム、教材の開発はもちろんのこと、事務手続き、外部組織との提携など、目に見えて変わった。参加者の意見は、翌年の運営に反映され、大学関係者のエネルギーな取組みが印象的であった。

日常生活では、危惧していた変化も目のあたりにした。ハンガリーは80年代に入って市場経済の要素を取り入れた改革を実施、政治面でも複数政党制の採用など、他の東欧諸国の改革の先駆けとなった。が、必ずしも全てが成功したわけではない。対外債務の大きさ、物価の高騰、失業者の増大、工業生産の停滞等、経済的な苦境が続いていた。毎年、訪れるたびに公共料金や物価が上り市民生活を直撃。とりわけ、年金生活者は、厳しい生活を余儀なくされていた。その他、国営企業、工

場の崩壊による職場保育園の閉鎖、混迷する出版文化、難民問題等、さまざまな困難な問題に直面していた。

そのような状況のなかでこれまで高い評価を受けてきた就学前教育が、どのように変わっていくのかは、私の大きな関心事であった。この小論では、4年間に見聞し、調査したハンガリーの保育について考察したい。

1. ハンガリーの保育制度

ハンガリーで初めての託児所は、1828年の設置という。従って、160年に及ぶ保育の歴史をもつが、就学前教育として位置づけられたのは、第2次大戦後のことである。ハンガリー人民民主主義共和国の成立後、社会主義国家の建設を目指すなかで制度も内容も整備されてきたとあってよい。経済活動を支える女性労働者が、仕事と育児を両立できるような労働条件の改善や、保育施設の整備・充実は重要な課題であった。と同時に、次代を担う子どもの全面発達を保障する場としても位置づけられてきたのである。

ハンガリーの保育施設には、年齢によって乳児保育園と幼児保育園に区分されている。表1のように、所轄官庁も異なる。

1. 乳児保育園と育児休暇制度

乳児保育園(bölcsőde)は、保健省の管轄でゼロ歳(生後5カ月)から3歳までの子どもを保育する。設置主体は公立がほとんどで、

その他、企業・職場保育園 (üzemi bölcsőde) がある。保育時間は、朝 6 時から夕方 6 時までの 12 時間。両親が子どもを連れて来て、一日の仕事を終えて迎えにいくことができるように設定されている。従って、子どもが保育を受ける時間は、そう長くはない。12 時間の保育時間は、保育者の時差出勤で保障している。保育料は無料だが、給食費の一部は父母負担となる。

就労率は 14%~15% にすぎない。女性のほとんどが経済活動に従事しているハンガリーでは意外に思われる面である。これを考える

表 1

| 名 称 | 乳児保育園 (bölcsőde) | 幼児保育園 (óvoda) |
|--------------|---|---|
| 所管行政庁 | 保 健 省 | 教 育 省 |
| 対象児 | 生後 5 カ月 ~ 3 歳未満児 | 3 歳 ~ 6 歳 |
| 保育時間 | 12 時間 | |
| 保育料 | 無料、ただし給食費を一部負担 | |
| クラス規模と保育者の配置 | ・ 0 (5 カ月から) ~ 2 歳児 - 12 名 ・ 保育者 1 クラス 1 名 (8 時間勤務) * 1 単位 2 クラスと 1 単位 1 名の助手 | ・ 1 クラス - 20 名 ・ 保育者は 1 クラスに 2 名 (6 時間勤務で二交替制) ・ 2 クラスに 1 名の助手 (雑役) |
| 保育者 | gondozónő (nurse) 中等保育専門学校卒業 (4 年制の中等教育機関) | óvónő (Kindergarten teacher) 高等保育専門学校卒業 (3 年制の高等教育機関) |

こうした制度を導入した背景には、第 1 に、乳児保育園設置の財政負担の大きさ。第 2 に、子どもが小さいうちは、自分の手・家庭で育てたいという女性の要求が強かったこと。第 3 に、母子関係を大切に考える医学、教育、心理学の専門家が、乳児の集団保育には積極的ではなかったこと。第 4 に、乳児保育の歴史が浅く、実践上の危惧が多かったこと等が指摘できよう。

現在、乳児保育園を利用するのは、専門職

には 1967 年以降実施されてきた、長期の育児休暇と、育児手当の財政援助との関わりをみなければならない。現在、ハンガリーの出産休暇は 24 週 (85 年まで 20 週) で有給。産前 4 週、産後 20 週である。育児休暇は、子どもが 3 歳になるまでとることができる。1 歳半までは、給料の 75% を保障。さらに、3 歳までとる人には育児手当 (第何子かにより金額が異なる) が支給される。このように、3 年間の育児休暇と経済援助があり、休暇後の現職復帰が保障されているので、家庭での育児を選択する人が多い。

の女性が多く、他に、単身で子育てする人、経済的な困難を抱える人等である。

このような長期育児休暇や育児手当の利用と乳児保育園利用の併用は、経済活動に従事する女性の二つの役割——労働と育児を両立する方法として、さらに、健全な人口を維持する人口政策の一環としても効果を上げて来たと評価されている。

しかし、近年あらたな問題が指摘されるようになった。育児休暇中の、若い母親達の育

児をどう援助するかである。どの国でも、育児力をどう高め、子育ての社会的援助システムをどう作るかは差し迫った課題だが、ハンガリーも例外ではない。

乳児保育園利用の働く女性への、さらに木目細い援助がある。子どもが保育園で着用する衣服——洋服、下着、外遊び用のヤッケ、帽子、マフラー、手袋等は保育園が用意する。制服ではないから、色、形もさまざまで共用でもない。子どもの個々のしるし(※ 印)が付けられていて、その子だけのものである。登園すると園用に着替え、降園するとき家庭から着てきたものに着替える。洗濯も保育園がする。どの園にも、大型の洗濯機や乾燥機のある洗濯室があり、洗濯、アイロン係が配置されている。

もう一つ、初めて保育園に入園する子どものための、「慣らし保育」にも注目したい。母子通園が2週間可能で、ゆっくり時間をかけ子どもの様子を見ながら、徐々に時間を延ばしていく。母親から無理に離さず、子どもと行動を共にしてもらう。子どもが愛用している玩具等の、持ち込みも許される。母親も育児休暇中なので、心身共に余裕があり、子どもの様子を見守りながら保育を理解し、保育者とコミュニケーションできるよう配慮されている。

2. 幼児保育園

幼児保育園(óvoda)は、教育省の管轄で、3～6歳の子どもが通う。子どもの年齢、教育機関としての位置づけからみると、日本の幼稚園をおもわせる。しかし、同時に、女性の就労を支えていることを考えると、保育園と訳したほうが理解しやすい。3～6歳の就園率は、100%に近い。就学前の1年は、就学に備えて義務となっている。

設置主体は公立が多く、他に企業・職場保

育園(üzemi óvoda)がある。90年からは、宗教団体、基金立等の私立保育園も設置できるようになったが、まだ数は少ない。保育時間は12時間だが、地域の親の労働時間に合わせて設定されている。

保育者は、教育職で6時間勤務。12時間の保育時間を2交替制で保育している。1クラスの子どもは20名、保育者2名、2クラスに1名の助手がつく。他に、園長、事務員、調理員、洗濯・アイロン係、園庭作業員・暖房係等の職員が配置されている。乳児保育園同様、保育料は無料で、給食費の一部が父母負担である。

◆幼児保育園の教育目的、内容

ハンガリーの幼児保育園の教育目的と内容は、『保育園の教育プログラム』(国立教育研究所編)に詳しい。ハンガリーの教育プログラムは、1957年、71年、89年に改定された。71年版は、羽仁協子氏のよって翻訳され、日本にも紹介されている。89年の改定版から、目的を要約すると、次のようである。

「幼児保育園は、教育制度の基礎的な部分である。保育園教育の目的は、3、6-7歳の子どもたちの多面的で調和のとれた発達を促すことである。保育園の教育は、子どもたちの発達に必要な多様な活動を準備し、家庭的で明るい雰囲気のもとで行われる。」

教育内容の構造は図1のようである。目的を達成するための保育内容構造については、次のように説明されている。

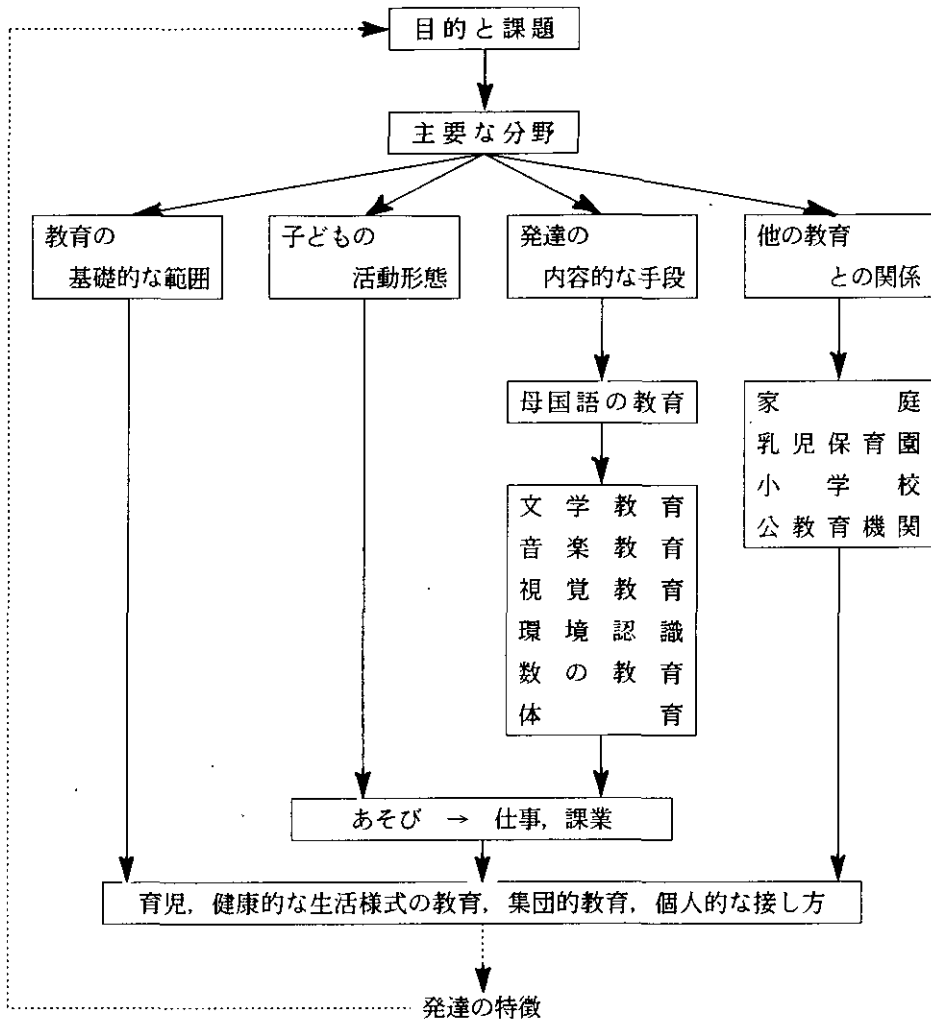
- a. 教育の基礎的な範囲は、育児、健康な生活様式の教育、個人的な接し方である。
- b. 子どもの活動の形態は、あそび、仕事、課業(学習的活動)で、この三つの活動は保育園教育の手段でもある。
- c. 発達の内容的分野—主要な分野は母国語教育であるが、課業の対象としてだけ実現できる課題ではなく、保育園生活全体、課

業——文学教育、音楽教育、視覚教育、環境認識、数の教育、体育を通して行われる。
 d. 幼児保育園の教育は、家庭、乳児保育園、

小学校等の協力によって最大の効果をもたらすことができる。特に、保育園と家庭の相互協力は必要不可欠である。

(図1)

保育園教育の構造



『AZ ÓVODAI NEVELÉS PROGRAMJA』10頁

3. 保育者

乳児保育園の保育者(gondozónő)は、8年制の義務教育を終え、4年制の中等保育専門学校(中等教育機関)で学ぶ。看護婦と同じような資格で、教育職ではない。勤務時間は一日8時間・週40時間で、休暇は年15日であ

る。

幼児保育園の保育者(ővónő)は、義務教育終了後、一般的には4年制の中等保育専門学校、さらに89年から3年制となった高等保育専門学校で学ぶ。高等教育機関で学ぶ幼児保育園の保育者は、教育職として位置づけられ

ている。勤務時間は6時間・週32時間で休暇は40日である。

興味深いのは、園長職についてである。誰でもなれる日本と異なり、園長資格が必要である。保育歴10年が必要条件で、その後4年間働きながら1カ月に3日学校に通い、指導者となるための教育を受ける。具体的には、教育学、心理学、経営学、家族法等を学ぶ。当然のことだが教育者として、指導者としての力量が問われているわけである。費用は、勤務先の保育園が負担する。

さらに興味深いことは、85年から導入された園長公選制である。園長候補者は、5年間の教育計画を明らかにし、保育者にその可否を問う。就任しても、支持されなければ途中解任もありうるという。行政が人事権を職場に委託することは、大変な英断といってよい。「保育者が前向きで、しっかりしていれば前向きな園長が選ばれるし、そき逆もありうる」という、関係者の声を聞いた。職場構成員の主体性と、民主的な職場づくりが尊重されなければ、公選制の良さが活かしきれないに違いない。

また、80年代に入ってから、保育者の再教育に力を入れている。71年の教育プログラム以後、研究・実践してきた結果を研修させ、新しい知識・技術を修得させる努力をしているという。教育研究所と、保育者養成校が卒業生対象に行う場合があるようだ。

II. 保育園見学と調査内容、方法

1. 見学と調査の意図

意図：ハンガリーの保育が、政治、経済等の改革のなかで、どのように変化しているかを把握し、考察すること。

期間：1989年～1991年－夏・1カ月
1992年－秋・1週間

方法：デブレツェン市の乳児保育園、幼児・保育園の保育見学と、前後して園長、保育者、指導主事にインタビューを行った。語学力の不足はカセットテープを使ったり、質問紙に書いてもらう等して補った。

2. ハンガリーの教育についての研修

ハンガリーの保育との出会いは、『ハンガリー保育園における美的教育』（ハンガリー国立教育研究所編）を読んだときに始まる。1972年のことであった。美的教育の基礎理論、領域－自然、日常生活、芸術作品、文学、美術、音楽、人形劇等の美的活動に言及していて、おおいに刺激を受けた。そして、その背後にあるハンガリーの文化・芸術にも関心を持つようになり、訪れてみたい国になった。

はじめてハンガリーを訪れたのは、1975年の秋。北海道音楽教育の会企画の、音楽教育研修に同行させてもらったときである。ブタペシュト、ケチケメート、ペーチの学校（保育園から大学まで）の授業参観と、コダーイ音楽研究所での講義と実技研修、そして民族音楽、舞踏、人形劇等に触れ楽しむことができた。

1986年冬の2週間、羽仁協子氏がコーディネートした保育研修に参加。ブタペシュトの乳児保育園、幼児保育園での保育観察－分析－討論と講義で、内容の濃い研修となった。特に、『ハンガリーの保育園の教育プログラム』（バコニ＝サバディ共著）による保育の実践を見学し、学んだことの意義は大きい。

1988年ハンガリー語を学び始め、その夏の3週間、友人とブタペシュトで過ごす。ハンガリーの人々、言葉、文化に触れるため、アパートを借りて生活。小旅行も楽しむ。

1989年～1991年の3年間は、デブレツェン市コシュート・ラヨシュ大学の「外国人のた

めのハンガリー語夏期大学」に参加、寮生活をしながら通学。大学生から80歳まで、仕事も国も異なる人達との1カ月にわたる共同生活は、楽しく貴重な体験となった。授業は午前中と夕方、午後の自由時間を利用して保育園見学。子どもとあそび、保育者と交流し、多くを学んだ。

1992年秋、ブタペシュトとデブレツェンを訪れ、デブレツェン市の保育園見学と市役所を訪問。指導主事からデブレツェンの保育についての実情を聞き、学ぶことができた。

Ⅲ. 保育園見学と調査の結果

1. 保育園見学 (89年)

1989年の夏は、乳児と幼児の保育園を見学。ハンガリーでは、7、8月に乳児保育園は3週間、幼児保育園は4週間休園する。この間、保育が必要な子どものために、夏期特別保育体制を組み保育している。

①第XIII区乳児保育園

ブダペシュトの都心からバスを乗り継いで40分、高層住宅が林立する団地内の乳児保育園。平屋建の園舎。乳児保育園は、2クラスを1単位と考え、更衣室と洗面室は1単位に一つ。この園では園庭も1単位に一つあった。

更衣室の中央にはベット（おむつ交換、着替え用）、壁側に靴箱、ロッカー、洗面台、ベンチ等がある。親は、ここで園用の衣服に着替えさせ、保育者に子どもを託す。

洗面室は更衣室に隣接。トイレ、浴槽（シャワー）、下着、タオルを入れた棚、ひとりひとりのタオル掛け、櫛入れも用意されている。清潔で気持ちが良い。

保育室は明るい。窓が大きく十分に日光が入るように工夫されているからだろう。机と椅子、玩具の棚、観葉植物、壁面の装飾品等

が全体として調和し、美しく落ち着いた雰囲気をつくっている。「子ども部屋」（直訳すると）という言葉がぴったりする保育室。棚には人形、ぬいぐるみ、積み木、自動車（のりもの）等が、子どものあそびを誘うように置かれている。一室で食べて、寝て、遊ぶのは、日本と同じ。しかし、日本より広いこと、そして何よりも空間を効率的に使っていることがわかる。あそびのコーナー、食事のコーナー、子どもの一日の生活の展開と、保育者の動線を考えた空間構成が印象的である。

保育時間は朝6時から、夕方6時までの12時間。見学した2歳児クラスは、子どもが10名で、保育者1名に助手1名。他に職員は、園長、事務員、調理員、洗濯・アイロン係、用務員がいる。

園庭は樹木に覆われていて、高層住宅団地にいることを忘れさせる。それほど緑が豊か。隣の庭との界は、生け垣で仕切られている。園庭には、プール、砂場、あそびの小屋、大型木製遊具が備えられている。広いこの庭が20名の子どものためと知って驚く。芝生の部分、三輪車を走らせる土の部分、プールの外側は遊水路になっていて芝生に水が溢れでないように工夫され、回りは舗装されている。さまざまな遊びができるように、園庭がレイアウトされている。

この日の気温は33度。10時を過ぎた頃、保育者がプール上部にあるシャワーの栓を開く。待っていたように数人の子が裸になりプールにはいる。水を浴びては、はしゃいでいる。水が少し溜まるとバケツやジョウロ、コップで水をいれたり出したりしてあそぶ。やがて、他のあそびをしていた子どもたちも、誘われるようにプールに入り出す。20分程でプールの水がいっぱいになると、腹這いになり泳ぐまね、もぐりっこを始める。ほぼ、1時間の水あそびは、水量によりあそび方が変わって

いくのが観察でき興味深かった。プールから上がった子どもたちは、体を拭いてもらい、庭でおやつを牛乳をのむ。

見学中、一度も保育者の大きい声を聞かなかった。全員に向かって大きな声で指示し、一斉に行動させることはない。プールに誘うときも出すときも子どもの様子を観察しながら、子どもの側まで行って声をかけている。子どもも、保育者もゆったり生活しているのが印象的であった。

②シモニ通り幼児保育園

デブレツェン市シモニ通りにある保育園で、3～6歳の子どもが通っている。定員は200名。幼児保育園としては大きな規模で8クラス編成。1クラスに25名程の子ども。保育者は1クラス2名で2交替制。他に2クラスに1名の助手がつく。職員は園長、保育者16名。助手5名、その他事務員、園庭作業・暖房、調理員6名(近くの保育園も含めて300名分の昼食を作るため)。

保育時間は朝7時～夕方7時までの12時間。8時30分～9時の登園が多く、8時以前夕方5時以降の子どもは大変に少ない。早朝登園の子どもは助手が世話をし、朝食も出す。園舎を囲むように園庭がある。樹木、花壇の手入れも行き届いている。そして何よりも広い。砂場が3、プール2、あずまや5、固定遊具、ベンチ、そして、子ども用の畑等が配置されている。

園舎は平屋建。保育室には更衣室と洗面所がセットされ、他に、一人一人の歯ブラシ、コップ、櫛が用意されている。外遊びから帰った子どもたちは、手を洗い、鏡に向かって髪を整えていた。

「子ども部屋」と呼ぶに相応しく、やさしく、くつろいだ雰囲気保育室。クラスごとに基調になる色を決め、絨毯やテーブルクロ

ス、エプロン等の小物をコーディネートしている。どのクラスも保育者の個性が出ていて興味深い。

部屋に入ってまず目にとまったのは、遊びのコーナー。3～6歳の子どもの中心的なあそびである役割あそび(ごっこ遊び)のコーナーがとても良く整えられている。子どものサイズに合った調理台や食器棚、食卓と椅子ソファ、乳母車や買物籠、台所用具等。そして、保育者手づくりのテーブルクロス、エプロン、冠、帽子、ショール、白衣等が子どもの目線に入るように配慮されている。

もう一つ、目にとまったものに人形劇の舞台と人形がある。舞台といっても、木製枠に布を貼った手製のもの、人形は幼児が使えるようなギニョール等、種類も豊富。子どもの好きな動物、お話の登場人物が並んでいて、思わず手にとってみたくなる。

保育室に、広いテラスが続く。天気の良い日は、遊び場にもなる。見学した日は、暑い室内を避け、風通しのよいテラスで昼食をとっていた。

2. デブレツェン市の保育見学と調査(90～92年)

デブレツェン市は、ハンガリーの北東部に位置し、ハイデュー・ビハール県の県都である。人口22万人で、ハンガリーで3番目に大きい。文教都市としても知られ、コシュート・ラヨシュ大学、医科大学ほか、教員養成大学、音楽大学等の7つの高等教育機関がある。カトリック信徒の多いハンガリーの中で、デブレツェン市はプロテスタントの拠点としても知られ、神学校もある。

また、タバコ、衣服、食肉、製薬等の工場もあり、産業活動も行われていた。

前述のように1990年～1992年までは、ほぼ同じ時期にデブレツェン市に滞在。ハンガリ

一語の講座に参加し、空き時間を利用しての保育園見学とインタビューを実施。大学と寮に近い一般的な保育園と職場保育園を選んだ。見学園は表2の14園。そのなかから幾つかの園について、特徴と概要をまとめた。

* 1クラスに保育者2名、助手1名。

保育時間：6時～18時

職員構成：園長1、保育者16、助手8、洗濯・アイロン係1、事務員1、園庭作業・暖房係1、調理員6

①マルトン ファールイ通り幼児保育園

公立保育園で地域の子どもが通う。この園の特徴の一つは、3歳未満児のクラスがあること。もう一つは、91年から希望者に英語を教え始めたことである。4歳以上の子ども80名を3グループ編成。午後のおやつの後に行っている。英語教育の専門家を招くための費用・1人300フォリントは父母負担となる。

定員：200名（夏期保育児60名）

クラス編成：3～4歳 25名 2クラス
 4～5歳 25名 2クラス
 5～6歳 25名 3クラス
 2～2,6歳 15名 1クラス

②デブレツェン医科大学・第1幼児保育園

いわゆる職場保育園。この大学は、乳児保育園1カ所、幼児保育園2カ所をもつが、いずれも大学構内にある。医科大学と付属病院で働く親の子どもを保育するが、学生や留学生の子どもも受け入れていた。保育時間は病院で働く人に合わせて設定されているので、朝5時30分と早い。早朝から7時までと、夕方5時半以降は助手が保育する。給食は病院で作り、運ばれてくる。保育園では、簡単な調理と盛り付け等を行う。洗濯・アイロン、園庭作業・暖房等も病院で行うので、保育園に係は常駐していない。

表2 見学した保育園

| 年度 | 保育園名 | 備考 |
|-------------------|--------------------------------|---|
| 1989 | ○ブタベシュト X III区乳児保育園 デブレツェン市 | 高層住宅団地内の乳児保育園 |
| | ○シモニ通り幼児保育園 | 夏期大学の担任ユリアンナ先生の紹介 |
| 1990 | ○デブレツェン医学大学第2幼児保育園 | 職場保育園 |
| | ○シモニ通り幼児保育園 | |
| 1991 | ○デブレツェン医学大学第1幼児保育園 | 職場保育園 " " シュタイナー教育を行うクラスがある |
| | ○ " " 第2幼児保育園 | |
| | ○ " " 乳児保育園 | |
| | ○マルトン ファールイ通り幼児保育園 | |
| | ○とり肉加工会社幼児保育園 | |
| 1992 | ○ " " 乳児保育園 | 夏期大学の担任ユリアンナ先生の紹介 の職場保育園 市役所の保育指導主事の紹介 ハンガリーの友人の紹介。デブレツェン市に近い村の保育園 |
| | ○コシュート・ラヨシュ大学幼児保育園 | |
| | ○ " " 乳児保育園 | |
| | ○シナイ ミクロシュ通り幼児保育園 | |
| | ○シボシュ通り幼児保育園 | |
| ○ハイデュー ハドハーズ幼児保育園 | | |

定員：94名（夏期保育児35名）

クラス編成：3歳児 24名 1クラス
4歳児 22名 2クラス
5歳児 24名 1クラス

* 1クラスに保育者2名、助手1名。

保育時間：5時30分～18時30分

保育者の勤務体制：7:00～13:30
10:15～16:40
10:30～17:00
11:00～17:30

職員構成：園長1、保育者8、助手5、調理員2

③デブレツェン医科大学・乳児保育園

②と同様、医科大学構内にある職場保育園。

第2幼児保育園に隣接している。

定員：44名

保育時間：5時30分～18時

保育者の勤務体制：5:30～13:30
7:00～15:00
8:00～16:00
9:00～17:00
10:00～18:00

職員構成：園長1、保育者8、調理員1、清掃係2

④ 鶏肉加工会社・幼児保育園

企業内・職場保育園。会社・工場で働く親の子どもが通園。工場に隣接した2階建ての園舎。この園でユニークなのは、6クラスのうち4クラスが、一般的なハンガリーの保育を實踐し、2クラスはシュタイナー教育を實踐していることである。同じ建物の中だが、シュタイナー教育のクラスにある家具、専用の園庭にある遊具もすべて木製。このクラスには、地域の希望者も受け入れている。会社・工場閉鎖のため92年4月に閉園。1クラスのみ公立に移管。

定員：200名、在籍176（夏期保育児60名）

職員構成：園長1、保育者12、助手12、調理員4、洗濯・アイロン係1、園庭作業員1

◆ハンガリー保育クラス

3歳 25～30名 1クラス
4歳 25～30名 2クラス
5歳 25～30名 1クラス

* 1クラスに保育者2名、助手1名

保育時間：5時10分～18時

勤務時間：保育者は6時間・2交替勤務
助手は8時間勤務

◆シュタイナー教育クラス

3～5歳 25～30名 2クラス

* 1クラスに保育者2名

保育時間：8時～16時

勤務時間：保育者8時間

⑤ 鶏肉加工会社・乳児保育園

会社・工場で働く親の子どもが入園。乳児保育園と同じ敷地内にあるが、乳児保育園と同様92年に閉鎖。

定員：44名（夏期保育児30名）

クラス構成：

1～2歳児 25名・保育者5名

2～3歳児 26名・保育者4名

保育時間：5時30分～17時

保育者の勤務体制：5:15～13:35

5:30～13:50

7:00～15:20

8:10～16:30

8:40～17:00

* 保育者は8時間20分勤務

職員構成：園長1、保育者9、調理員3、洗濯・アイロン係1、清掃係2

IV. 考 察

1. 見学と調査結果からみる共通点

14の保育園を見学、インタビューし、気づいた点を次にまとめたい。

乳児、幼児保育園ともに、保育環境が良く整備されている。都市でも小さな村でも、設置主体——自治体、企業を問わず一定の水準が保たれていてうらやましいほどである。

①保育室、園庭などの環境の整備。

園舎の建て方は一律ではないし、職場保育園には、既存の建物を利用した施設もあった。しかし、子供の生活の場——保育室と更衣室、洗面室がセットされていること。さらに、子どもの生活の場と、管理棟——調理室、洗濯室、事務室等、大人の働く場が廊下で区切られていて、それぞれに生活・仕事がしやすいように考えられていた。

保育室には、「子ども部屋」と表示されている。どの園の保育室も、親しみのある雰囲気でも、決して子どもに媚びることはなく、部屋全体が美的な調和を保っている。

『ハンガリー保育園の教育プログラム』（71年版）には、「子どもの集団生活が行われる場、つまりクラスの部屋から、玄関、洗面所、庭にいたるまで、すべて家庭的にしなければなりません。子どもはまずは、自分のクラスの部屋の中、やがては園全体を自分の家のように思うでしょう。」（注1）とある。保育の目的の項でもふれたように、ハンガリーの保育園は、家庭的な雰囲気の中で保育することを大切にしている。保育園は、家庭に代わって、子どもが生活する場でもあると考えているからである。

園庭はどの園も広い。保育園探しをしたとき気づいたことは、緑に囲まれている一角が保育園だということだった。樹木、花壇など

も手入れが行き届いている。実のなる木があることも楽しい。園庭は単なるグラウンドではない。園により異なるが、斜面、平坦な場所、芝生、土、アスファルトなど、多様な遊びが展開できるようにレイアウトされているのが印象的だった。また、テラスも広く外気に触れ食事や午睡し、天気の良い日には遊ぶこともできる。

② 保育を支えるさまざまな職種の人

前述したように、保育園にはさまざまな職種の人が働き、保育を支えている。子どもの衣服やタオルを洗濯する人、観葉植物、樹木、花壇の手入れする人、事務員、調理員、そして助手。保育者以外に、保育園で働く人が本場に多い。

幼児保育園の、保育者の配置は1クラス2名。勤務時間は長くて6時半、2交替制で12時間の保育時間を保障している。さらに園により数は異なるが、助手がつく。助手の勤務時間は8時間である。子どもの着替え、排泄、手洗いなどの世話、食事や午睡の準備や後片付け、遊具や部屋の整頓等、保育を進める上で大切な細かな仕事を担う。こうした支えがあって、保育者は本来の仕事——子ども一人一人の様子を観察し、適切な指導ができるわけである。

③「流れる日課」と「個人的な接し方」

日本では、集団保育イコール一斉に子どもを動かすことと思われ、いつも一緒に行動し、順番を待って並び騒々しい様子が目に写るようだ。ハンガリーの保育園では、事情が違っていた。一斉に子どもを動かす「区切られた日課」ではなく、「流れる日課」を採用しているところが多い。大切なあそびの時間を十分に取り、子どもが集中して遊べるようにしたい。基本的な生活行動を身につけ、日課を作れるよ

うにとの願いから考え出された。

子ども個々のペースで日課が進められているので、急かせられることなく生活できる。もちろん、一応の時間の目安は決まっているので、昼食時になると食事の用意を始める。おなかのすいた子、遊びが一段落した子は片付け洗面室へ。排泄し手を洗って食事を始める。だから行列を作って順番をまち、騒々しくなることはない。

午睡から覚めた時も同じだ。目覚めると直ぐに起きて来る子、しばらくはベッドの中にいる子、まだ眠っている子などさまざま。起きた子は、騒々しくなく次の行動にうつる。子どもたちは、今なにをしなければならぬかを、よく知って行動しているようだ。保育者も大声で指示することはない。子どもの様子を観察しながら、必要な時は個々に声をかける。

子どもや保育者の落ち着いた生活ぶりは、こうした日課の進め方によるところが大きいと考える。前述したように施設、設備の充実、人員配置はもちろんのこと、保育内容、方法の研究に裏付けられた実践が実を結んでいる。国立教育研究所の専門家と、実験保育園の保育者達の視点は、いつも実践上の問題点をいかに解決するかに注がれている。「流れる日課」も、そうした取組の中から生まれた。

見学しながら、86年に聞いたサバディ女史（『ハンガリー保育園の教育プログラム』の著者）の講演を思い出した。1950年代に保育園を増設する時に、何を大切にしたいかということである。統計を見ると1950年に189カ所だった保育所が、55年には683カ所、60年には816カ所と急増していることがわかる。

一番大切にしたのは、保育園で子どもが楽しんで生活できるような良い環境にすることだったという。なぜなら、戦後、親世代は保

育園についての経験がなく、子どもを託すことへの不安が大きかったからだ。親たちの信頼を得るためには、家庭に代わって子どもが昼間の大半を過ごす保育園の環境を良くすることを、第1に優先したのだった。もちろん、当時は1クラスの子どもの人数も多く、すべてが十分だったわけではない。しかし、生活する子どもにとって、託す親にとって、何が大切かという視点で整備されてきたことの意義は大きい。

2. 改革なかでの保育園の変化

①保育園数にみる変化

表3・4は、デブレツェン市の保育園数の推移だが、激動の跡が保育園数にも現れている。90年9カ所だった企業・職場幼児保育園が92年には4カ所に減った。タバコ、被服、ハンガリー鉄道、鶏肉加工会社の工場閉鎖や縮小による、職場保育園の閉鎖が原因である。同様に乳児保育園も減っている。通園していた子どもたちは、地域の保育園に転園したり、親の失業で家庭にいる子もいるという。

91年に訪れた鶏肉加工会社の職場保育園は、前述したように200名定員の大きな保育園であった。2クラスがシュタイナー教育を実践していて、市内の保育者の関心を集めていた。

2年間4名の保育者がオーストリアでシュタイナー教育の研修を受け、さらに1名が91年秋から1年間、オーストリアで学ぶことになっていると話してくれた。しかし、92年4月には、工場閉鎖のため保育園は1クラスに縮小され、公立に移管された。秋、訪れたときは、シュタイナー教育実践のために作られた2保育室で、26名の地域の子どもを保育していた。公立に移管しても、父母の理解を求めシュタイナー教育を実践していること、行政もそれを、認めていることが興味深い。

ハンガリーでは、1990年から、私立保育園

表 3

デブレツェン市の幼児保育園数、園児数の推移

| | 1987 | | 1988 | | 1989 | | 1990 | | 1991 | | 1992 | |
|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-----|
| | 施設数 | 園児数 | 施設数 | 園児数 | 施設数 | 園児数 | 施設数 | 園児数 | 施設数 | 園児数 | 施設数 | 園児数 |
| 公立保育園 | 49 | 7,836 | 48 | 7,915 | 48 | 7,916 | 48 | 7,913 | 48 | 8,072 | 49 | - |
| 職場保育園 | 10 | 1,058 | 10 | 1,087 | 9 | 1,020 | 9 | 928 | 8 | 840 | 4 | - |
| 私立幼稚園 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - |

表 4

デブレツェン市乳児保育園の推移

| 年 | 保育園数 | 0～3歳の人口 | 入園児数 | 就園率 |
|------|------|---------|-------|------|
| 1985 | 26 | 7,489 | 2,016 | 26.9 |
| 1986 | 22 | 7,426 | 1,791 | |
| 1987 | 23 | 7,778 | 1,727 | |
| 1988 | 24 | 7,716 | 1,791 | |
| 1989 | 22 | 7,794 | 1,681 | |
| 1990 | 20 | 7,909 | 1,402 | 17.7 |
| 1991 | 19 | 8,618 | 1,282 | |
| 1992 | 17 | 8,400 | 1,174 | |

が設置できるようになった。デブレツェン市でも、92年に2園設立されている。指導主事の説明によると、一つは教会の保育園。もう一つは基金立で市から建物貸与、運営費50%の助成を受けているので完全な私立とはいえないという。保育料は月4,000フォリント、基金立は年10,000フォリントである。公立は無料だから、私立を利用する父母の経済的負担は大きい。92年に訪れた時は、私立保育園のそんな高い保育料を払える人がいるのか、と市民の話題になっていた。指導主事は、保育料は高いが1クラスの子ども数が少なく、一人一人を大切に保育できるのが、私立の良い点だと話してくれた。

乳児保育園の私立は、まだできていない。設立したい人はいるし、できることを待っている人もいるという。しかし、乳児保育に必要な費用は、年間1人150,000フォリント(幼

児の3倍)である。若い夫婦の給料は安いので、私立の高い保育料を払うことは難しいこと。乳児保育は基本的な保育のサービスが中心なので、幼児保育園のように保育の特色を出すことが難しいことが私立乳児保育園ができない理由だという。

② 財政難が及ぼす影響

「運営費が十分に欲しい。」というのが、園長、保育者達共通の願いだった。保育園はこれまでの国立から公立になり、地方自治体の負担が大きくなった。しかも、インフレが続き、91年のインフレ率は35.1% (実質賃金の低下は14%) なのをみると、運営の苦勞も想像できよう。大型の修理が思うようにできない。教材も十分に購入できない。冬用のヤッケの値段が上がって揃えるのが大変等、切実な声をどの園でも聞いた。今では、教材費など父母に協力を求めることもあるという。毎年訪れるたびに、公共料金や物価が上がっていたので、運営の大変さがよく理解できた。指導主事のインタビューでも、財政的な困難を第1にあげていた。例えば、幼児1人あたりの年間経費は、52,000フォリントだが、国からの支給は19,000フォリントで十分ではないし、市の財政も苦しい。つまり、理想的な教育に必要なお金と、現在の経済状態が逆なので苦勞が多いのだという。

財政難は当然、保育条件にも影響する。指

導主事の説明では、デブレツェン市で問題なのは、幼児保育園の1クラスの人数が多く、国の基準が守れないことだという。1クラス20名の国基準が守れないばかりか、30名をこえる園が8カ所あるのだと。保育園閉鎖が、さらに事態を深刻にしているようだ。指導主事は「一人一人を大切に保育をしたくても、大変に難しいし、保育者の力量を必要とする。小さいグループなら、個々人の才能を延ばすことができるし、遅れを持つ子の援助もしやすい。しかし、人数が多くなれば預かることしかできなくなる」と語ってくれた。

どの園でも、日本の保育について質問された。幼稚園は1クラス40名、保育園の4～5歳児は30名が国の基準。そして保育者1名、助手なしと答えると、驚かれる。「日本は経済大国」なのに、なぜか、と再質問された。それでは良い保育はできないだろうと同情されてしまう。

財政難は、保育者の給料にもひびいているようだ。デブレツェン市の保育者の給料はハンガリーの平均よりも低いのだという。

③ 保育の特色を出そうとする保育園

これまで私立保育園はなかったし、公立、職場保育園を問わず、『ハンガリー保育園の教育プログラム』を指針に保育してきた。指導主事によると、良い変化の一つは保育の特色を持つようになったことだという。例えば、外国語、体育、アレルギーの子どものグループを作る等、特色を出すやり方に人気があるようだ。

89年に訪問した時は、そうした動きは見られなかった。91年～92年にかけては、シモニ通り幼児保育園はドイツ語。マルトン、フェールイ通り幼児保育園は英語。シナイ通り保育園は、ハンガリーの伝統を保育に組み込んだ保育というように増えていた。その他、シ

ュタイナー教育やフレネの影響を受けた保育者が、その考え方を保育に取り入れるなどの動きもあるという。保育の特色といっても、毎日の保育の中に位置づけ実践している保育園と、英語教室のような習いごとの的なものと二通り見受けられた。外国語の教室等は、午睡後や夕方に希望者を対象に行われていた。語学の専門家を呼ぶ経費などは、父母負担となっている。

3. 保育者Kの保育への願い

通学途中にある医科大学の職場保育園を、時折訪問しては子どもと遊び、保育者とも親しくなった。Kはベテランの保育者、二人の子どもの母親でもある。いつも快く迎えてくれ、言葉のハンディがある私に、根気よく相手をしてくれた。

次に記したのは、「あなたは、これからのハンガリーの保育園に何を望みますか？」という質問へのKの答えである。

- a. 自由経済に移行してから、デブレツェンでも企業・職場保育園が次々と閉鎖している。子どものためにも、閉鎖しないでほしい。
- b. 1クラスの子どもの数は、20名以内にしてほしい。
- c. 保育園の環境整備や運営が十分機能するように、運営に必要なお金を支給してほしい。
- d. 全ての幼児保育園が、自分の顔＝特徴をもってほしい。みんな同じではなく、異なった教育方法、課業があってよいと思う。
- e. 全ての保育者が、自分自身で保育方法を選べるようにしたい。保育の基本的な方針は必要だが、どのような方法を選ぶか——課業の内容、テーマ、教材等は、保育者自身に選ばせてほしい。ただし、いつも子どものためになるように、子どもの発達を促

すことを条件にしていることだが。

- f. 高等保育専門学校は3年間必要である。
 (Kのときは2年。89年から3年になった)
 そしてもっと専門的な知識や技術を学べるようにしてほしい。例えば、幼児体育、言語障害児の治療、家族へのカウンセラー等が学べるとよいと思う。

見学した園の園長、保育者にも同じ質問に答えていただいた。一番多かったのは、財政的保障をしてほしいということ。次いで、それぞれの園が特徴を持ったほうがよいこと等である。Kの願いは、保育行政、保育条件、保育者養成、そして保育内容・方法にも及ぶもので、インタビューした園長、保育者の願いを代表しているといえよう。

お わ り に

保育園見学・調査時期は、夏期の特別教育期間であった。ハンガリーでは7、8月に乳児保育園が3週間、幼児保育園が4週間休園する。いわゆる夏休みだが、親達も休暇をとるので特に問題はないという。保育が必要な子のために、市内の保育園が交替で保育するよう配慮されていた。この間に、施設の清掃、水回り点検・整備、内装を行う。「ハンガリーは貧乏な国だから、水回り、内装等は毎年するが、外装は3年に1度位しかできない」との説明だった。保育者も夏休みをとるが、新年度の計画などの会議や、準備なども行われているようだ。

従って、夏期保育期間は、他園の子どもと一緒に保育することになる。なのに、子どもたちは、まるで自分の保育園のように違和感なく溶け込み、落ち着いて生活していた。それは、前述のように施設の基本的な所が同じであること、保育内容、方法が同じ教育プロ

グラムに従って展開されていることと、関係するように思われる。しかし、保育者たちには同じであることが、気になっているようだ。シュタイナー教育等の、実践も許されていたのだから、保育方法を選ぶ自由が全くなかったわけではない。指導主事によると、毎日の保育では体育が必須になっているが、それ以外は自由に計画できるようになったという。

政治・経済改革が進むなかで、他国の保育内容・方法等の情報が保育者たちに届きはじめた。そうしたなかで、これまでと違う保育内容・方法に魅力を感じるのは、当然のことであろう。暫くは、試行錯誤が続きそうだ。しかし、その際、ハンガリーの保育関係者が培ってきた内容・方法について改めて吟味してほしい。評価されている点は伝承し、発展させてほしいと願うからだ。

良い変化の一つに、保育園が父母の意見を良く聞くようになった点もあげられていた。外国語教室は、父母の要求で始めた所もあった。父母や保育者の好みや関心だけが先行して、遊びを大切にしてきた保育がないがしろにされることにも疑問を感じる。変化の激しい時期は特に、Kが指摘したように、子どもの発達を促す方向を見定める保育者の力量が問われるのだろう。

語学力の不足もあって、十分に調べられなかった面もある。しかし、毎年同じ時期に継続して見学し調査できたことで、保育が変化していく様子を把握し考察することができた。今後も、どのように変化していくかを見守りながら、保育についての研究を重ねたい。

この小論を書くにあたって、多くの方に御世話になった。見学を許して下さり、インタビューに応じて下さったハンガリーの保育関係者の方々。私のハンガリー語を援助して下さった橋本ダナ氏、パログ・マルトン

氏、小野寺ガブリエラ氏にお礼申し上げます。

引用文献

(注1) バコニ・サバディ共著『ハンガリー
保育園の教育プログラム』明治図書 1974年
17頁

参考文献

1. ハンガリー国立教育研究所『ハンガリー
保育園における美的教育』明治図書 1972
年
2. バコニ・サバディ共著『ハンガリー保育
園の教育プログラム』明治図書 1974年
3. ILO 編『東欧女性の労働と生活』労働教
育センター 1981年
4. Országos Pedagógiai Intézet『AZ
ÓVODAI NEVELÉS PROGRAMJA』
Tankönyvkiadó Vállalat 1990
5. 川野辺敏編『世界の幼児教育第3巻ソビ
エト・東欧』日本らいぶらり 1989年
6. 全国保育団体連絡会『激動の東欧を訪ね
て』1990年
7. 谷咲子「ことば・ハンガリーを訪ねて」
北海道保育問題研究協議会編『北海道の
保育』第15号 1990年